

「近視眼的殺意と啓示的展望」

ダニエル6：1－13

March.22.2020

ダニエル6：1－13 (パワポ)

Preface

私は大学3年生の時、イエス様に出会い、クリスチャンになる恵みに与りました。そして、賛美を知らない者から、賛美を知る者へと変えられました。

賛美を知るだけでなく、音楽に合わせて、**神を褒めたたえる賛美**が楽しくて、楽しくて仕方がなくなっていました。

そして、音楽の本来あるべき姿がここにあると思いました。

「音楽や人間の持つ音楽性は、本来、神を褒めたたえるために与えられているものなんだ！」と思いました。

それまで知ることも、触れることもなかった音楽の本来あるべき姿に出会ったような気がしました。

元々、音楽は好きで、かじる程度にピアノを習ったり、ドラムを叩いたりしていましたので、賛美という、音楽の中の音楽、音楽の本来の姿に出会ったのですから、賛美が好きで好きでたまらなくなりました。

賛美CDを買いあさり、ギターまで買って、ホームステイ先の部屋でギターを弾きながら、賛美を歌うようになりました。

以前、ギターを弾いてみたいと思い、挑戦したことがあったのですが、指先だけ痛くてつまらないと思い、すぐに辞めてしまったのに、賛美を歌うためならばギターを弾くことが全然全く苦になりません。

そして、賛美が趣味になりました。

三度の飯より、賛美が好き？でした（ちょっと言い過ぎでしょうか…）。

賛美なら1時間でも、2時間でも歌い続けられるほどに好きでした。

Part One

じゃあ、何でそれほどまでに、賛美を歌いたかったのか？

それは、イエス様がなしてくださったことが、感謝で感謝で仕方なかったからです。

1. こっちはイエス様のことなんか、これっぽっちも知らなかったのに、イエス様は私のことを生まれた時から、いや生まれる前からずーっと知っていてくださって、私が全く知らない、知る由もないところで、もうすでに私のために、私の罪を許すために、命を懸けて十字架に架かって下さり、無残にも死んでくださ

り、復活までされて、救いを用意して下さっていたということが、感謝で感謝で仕方なかったからです。

誰かのことを思って全力を尽くしてやったのに、その誰かが、私がやったことに気付かないことほど、やるせなく、心が痛むことはないと思うのですが、

イエス様は、無視されようが、知らんぷりされようが、ないがしろにされようが、いないものと扱われようが、関係なく救いを成して下さり、待っていて下さったことが、申し訳なくて、感謝で感謝で仕方ありませんでした。

私が全く気付かないのに、いちいち守り、いちいち導き、いちいち与えて下さっていたイエス様が、感謝で仕方ないのです。

2. さらに、これからの人生、全部イエス様の手の内にあり、**私の人生確実なものになった**ということが、嬉しくて嬉しくてたまりませんでした。

それまでの人生は、自分の人生をより**確実にするために**、努力し、蓄え、勉強し、人脈を作っていくが、いかにやらなかったのに、イエス様の内にあれば、人生が**確実になる・なった**ということが、嬉しくて、嬉しくて仕方ありませんでした。

もっと言いますと、死を恐れながらびくびくして生きる、なるべく死なないことを動機にして生きる人生ではなく、

与えられた永遠のいのちを喜びながら、死ぬことを恐れる人生ではなく、神の栄光のために、神の御旨のために、自由にのびのびと、神に肯定された存在として生き、約束の天の御国に入ることが**確実な人生**になったことが、嬉しくて嬉しくてたまりませんでした。

もうこれ以上、持っていないことや無いことに縛られることもなく、人に縛られることもなく、お金に縛られることもなく、社会に縛られることもなく、神の御国に生き、神の御国に望みを馳せ、**確実な勝利**が約束されている豊かで、自由な人生を生きることが出来ると、嬉しくて嬉しくてたまりませんでした。

★つまり、私の知らないところで、もうすでに成して下さった**過去の恵み**と、私が知れるようになった、もうすでに確実になされている**未来の恵み**が、感謝で感謝で仕方なく、また嬉しくて嬉しくて仕方がなく、賛美をささげ、賛美が楽しくて仕方がなかったのです。

そして、会う人会う人にイエス様のことを伝え、牧師になるために喜んで神学校へと進みました。

それから20数年、いつのまにか、自分の生活から賛美が減っていき、時には消え、いつからか、「私の趣味は賛美です。」と言えなくなっているような状態にあることに気付かされました。

いっちょ前に生意気にも人生の波に揉まれているうちに、いつのまにか、イエス様がなしてくださった**過去の恵み**ともうすでに完了した**確実な未来の恵み**に感謝することよりも、今、目の前にある不安ばかりに心が向き、捕らわれていきました。

恵みと確実性の源であられるイエス様に目が向かずに、眼前に広がっている不安で、不安定な現実ばかりに心が、捕らわれるようになってしまって、喜びや感謝に溢れて賛美を献げることよりも、「今、どうかしてください。」という、不安げな嘆願ばかりをつぶやいてしまっていることに気付かされました。

もちろん、これも祈りです。

これも神様が聞いてくださる祈りなのですが、神がもうすでに成してくださった過去と未来の恵み、そして約束に、信仰の目が向かずに、今を生きることばかりに汲々となって、賛美が消えてしまった…

もうすでに、神が成してくださった**確実で確かな恵み**ではなく、
今、これが解決しないと大変なことになる、
今、これが無いと大変なことになる、
今、この関係が保たれないと大変なことになる、
今、この痛みが取り去られないと大変なことになると、不安ばかりを募らせて、**確実に大丈夫にされた神の約束は、どこかに吹き飛んでいってしまうのです。**

「今、これが・このことが何とかならないと永遠の命なんかには至れないし、約束の地なんかには入れない。いや、この問題が何とかならないと、永遠のいのちも、約束の地も、天の御国も、何の役にも立たない！ だから、今、これをどうかしてください！ 解決してください！」と、お賽銭投げて神社の鈴をカラカラン鳴らして、自分の所望を叶えることが祈りだと言うばかりの祈りしかささげられず、いつのまにか賛美が、自分の生活から消えていることに気付かされました。

いつのまにか、今しか見えず、今がすべてで、今が目的で、今が偶像になって、賛美が消える…これが自分の身にも起こっていることに気付くんです。

Part Three

旧約聖書を見ますと、
主なる神様の恵みと選びと導きの元、エジプトの奴隷の身分から救い出され

たイスラエルの民が、乳と蜜の流れるカナンの地を、約束の地として与えられるという、特別な祝福に与っていることが記されています。

出エジプト記 3 : 7 - 8 (パワポ)

80歳になるモーセに主なる神様が現れてくださって告げた言葉です。

“苦役に付しているイスラエルの民を救いだし、乳と蜜の流れる約束の地へと導き入れる” という内容ですが、

この約束は、ここで初めて語られた内容ではなく、イスラエルの祖先、アブラハム、イサク、ヤコブにもうすでに語られた約束であり、約束の確認です。

すでに成されている救いの約束、良い地へと導き入れるという約束の確認です。

これから起こること、つまり未来に起こることではありますが、与えられたことが約束されているのです。

神の手に内に、もうすでに完了している救いと祝福の約束です。

起こるかもしれないことではなく、起こった、確実に確かな約束です。

なのに、部族を代表して、そのカナンの地に偵察に行った12人のうち、カレブとヨシュアを除く10人は、「この地は与えられることもないし、取ることも出来ない。やるべきことがたくさんあるばかりでなく、それを成す力なんか私たちにはないし、そこに住む人たちはあまりにも恐ろしくて、その地に入ったらやられてしまうことが目に見えている。」と、

神様が与えてくださっている確実な約束と祝福を、全否定しました。

もうすでに成されている揺るぎない神の約束よりも、

今、大変なこと、今、力がないこと、今、怖いことに、心が奪われて、

もうすでに成してくださった出エジプトの救いという**過去の恵み**と、もうすでに成してくださった約束の地を与えるという**未来の恵み**を、吹き飛ばしてしまいました。

そればかりでなく、神の成してくださった過去の恵みと未来の恵みの確実性を信頼し、信じたカレブとヨシュアを殺そうとまでします。

民数記 13 : 27 - 14 : 11 (パワポ)

“今”に捕らわれて、神の祝福を見失っている民が、神の恵みと約束を信頼し、神の恵みと約束を説き、神の恵みと約束の内に民を導いた主の祭司であるモーセとアロンを、ひれ伏させ土下座をさせるばかりでなく、カレブとヨシュアまで

殺そうとしました。

“今”に捕らわれ、神の恵みを吹き飛ばす近視眼的な思考が、今ある恐れを正当化し、その恐れを取り除くためには、人を傷つけ、殺めることさえも妥当だとし、抱いた殺意まで肯定して、人々の心をかき立てました。

そんな中、ヨシュアは、8節9節で、

民数記14：8－9（パワポ）

と、“もうすでに”神が成してくださった恵みと約束を見失ってはならないと衣を引き裂きながら、訴えました。

“今”に捕らわれ、捕らわれた結果生じる恐れを正当化し、その恐れをもって、神に背いてはならないと訴えました。

神に背くとは、もうすでに成してくださった過去の恵みと、もうすでに成してくださった未来の恵みを忘れて、“今”の恐れを肯定することです。

11節で、神様がこうおっしゃいます。

民数記14：11（パワポ）

今日の説教題を、「近視眼的殺意と啓示的展望」と付けましたが、イスラエルの民たちは、“今”の恐れに捕らわれ近視眼的殺意しか抱けませんでした。

でも、カレブとヨシュアは、神様の言う「わたしがこの民の間で行ったすべてのしるし」に信頼した啓示的展望を抱きました。

つまり、眼前に広がる困難が、神が与えたもうた恵みと約束を吹き飛ばしてしまう理由にはならないのです。

信仰とは、“今”目の前にある問題を超えてなお、神が与えたもうた恵みと約束の確実性から目を離さずに、神を褒めたたえ、賛美することですね。

カレブとヨシュアは、それでもなお、与えられている恵みを覚えて、啓示的展望に立ち、神を褒めたたえました。

でも、信仰がなければ、“今”に捕らえられて、ここに出てくる会衆のように近視眼的な殺意を抱いて終わりです。

信仰があれば、なおも、神の恵みと約束の確実さに目を向けることができます。

“今”という現実には傷つき、押しつぶされても、なおある、永遠のいのちと神の御国と言う相続を見上げながら、感謝して、神を褒めたたえるのです。

Part Four

私の神学校の先生が書いた本の中で、すべての人の内面には、なかなか飼いなすことの出来ない3匹の狐が住んでいると言っていました。

その3匹の狐とは、①野望 ②嫉妬 ③競争心 です。

今、カレブとヨシュア以外の10人の偵察隊と会衆には、カナンの地を手に入れるという野望がありましたが、その野望がへし折られて、叶えられないと嘆きながら、そのやるせなさをカレブとヨシュアにぶつけました。

そして、全く別次元の神の恵みを覚える啓示的展望によって、カナンの地を与えたという神の約束にフォーカスしているカレブとヨシュアの生きる姿勢に嫉妬して、打ち負かしてやろうと競争心を抱くものの、

カレブとヨシュアの透き通った信仰の前に、自分たちには勝るものがないことに苛立ち、二人を消してしまえば、ひとまず敗北感のような感情は抑えられるという近視眼的な殺意による解決方法しか、思い浮かばないという状況です。

これが私たち人間ですね。

自分の内に住む野望と、嫉妬と、競争心から来る、敗北感を消すためならば、人を殺めることさえ正当化できてしまうのが、私たち罪人です。

イエス様は、マタイの福音書で、人に、馬鹿者と言うだけでも、神の前にあってそれはもう立派な殺人だとおっしゃいました。

今まで、どれだけ、野望と嫉妬と競争心に駆られた敗北感を消すために、人のことを馬鹿者と口にする殺人を犯してきたことか… わかりません。

神に与えられている確実な恵みと約束に目を向けているヨシュアとカレブには、野望、嫉妬、競争心という3匹の狐は、制御できない獣ではないですね。

彼らだって人ですから、野望、嫉妬、競争心の3匹の狐は、視野には入ってくるでしょう。

でも、彼らの唯一のフォーカスは、神より与えられし啓示的展望のみです。

Part Five

そして(ちょっと前置きが長くなりましたが)、こういう観点から、今日の聖書箇所ダニエル書6章を見てみますと、野望と嫉妬と競争心に駆られた近視眼的殺意しか抱けていないメディア・ペルシア帝国の臣下たちと、

歩んできた82年の人生に臨んだ神の恵みと、これから起こる確実な未来の恵みと約束にフォーカスした、啓示的展望に包まれているダニエルの姿が見えてきます。

ダニエル6：4-11 (パワポ)

前回のダニエル書の復習になりますが、一線を退いて30年近くも経つ82歳になるダニエルは、またしても政府の要人として迎え入れられました。

それも、ただの要人ではなく、メディア・ペルシア王国の臨時政府・臨時政権の王ダレイオスの次の位、No.2へと迎え入れられました。

ここで黙っちゃいけないのが、ダニエル以外の2人の大臣と120人の太守たちです。

身を粉にしながら、メディア・ペルシアに仕えて、苦労しながらやっとの思いで高位高官にまで上り詰めた彼らにしてみれば、

滅びたバビロン帝国の元要人であったダニエルは、ポツと出の全くの部外者であって、しかもイスラエルとか言う、とうの昔に滅びた小国から捕まってきた捕虜出身のクリスチャンだと言う、得体の知れないよくわからない輩が、実質国政を担っていくNo.2に就いたということが、到底受け入れられませんでした。

はらわた煮え繰り返るような怒りと、苦虫をつぶしたかのような不快感に突き動かされて、ダニエルを失脚させようと試みますが、失脚させられるようなスキャンダルが何一つ見つかりません。

そこで、窮余の策として、ダニエルの信仰をもって、落とし入れようと画策します。

信仰をもって、人を落とし入れることほど、幼稚で愚劣なことはありません。

でも、それを国家のリーダーたちが、するわけです。

国中の人々が、王以外の存在に祈りをささげたならば、所有することが権力の象徴でもあった獅子、の穴にぶち込んで殺害するという、国家信奉主義的な観点からすれば、至って当然、いやむしろ、賞賛に値するかもしれない禁令を出しました。

現代日本もその余韻にまだあるように見えますが、戦中・戦前の天皇崇拝に酔いしれた、傍若無人な時代に似ているところがあります。

でも、聖なる神の霊の宿る人ダニエルは、再び訪れた危機を前にして、やったことはただひとつ。

それまでの神の恵みを反芻し、これからの確かな神の恵みを待ち望む、啓示的展望に立ち、いつものように、ひざまずき、祈りをもって、いと高き唯一の神に祈りをささげていました。

ダニエル6：10（パワポ）

このダニエルの祈りは、先ほどお話しした私のような、神の恵みと約束を忘れ、目の前に広がっている問題と苦痛に圧倒されながら、近視眼的な絶望にはまっけてしまい、不安げな嘆願ばかりを並び立てるつぶやきのような祈りではありません。

先ほども言いましたが、もちろん、これも祈りです。

慈しみ深い主なる神様は、こんな祈りでも喜んで聞いてくださり、応答して下さいます。

でも、一つ問題があります。

それは、“今”に捕らわれて、神様がもうすでに成してくださった過去の恵みと、もうすでに完了しているこれから成して下さる未来の恵みに目が行かず、今をやり過ごすことばかりに汲々となって、賛美が、神を褒めたたえることを忘れてしまっていることです。

ダニエルは違いました。

今、No.2の座から引き降ろされるばかりか、獅子の穴に投げ込まれて、八つ裂きにされながら、食われてしまうという恐怖でしかない状況が目の前に広がっているのに、なおも、感謝をささげます。

この祈って、感謝をささげたというのが、神を褒めたたえる賛美であるということが、2章を見ますと、よくわかります。

ダニエル2：19－23（パワポ）

思い出してください。

今、この時、ダニエルは、ネブカドネツアル王の夢を解釈できなければ、ダニエル自身を含めた国中の知者たちを皆殺しにするという、何とも身勝手な権力者の横暴という絶体絶命の危機に瀕していました。

そんな時も、ダニエルは、いと高き天の主なる神様を褒めたたえました。

賛美するんです。

そして6：10。

ダニエル6：10（パワポ）

彼は以前からしていたように、日に三度ひざまずき、自分の神の前に祈って、感謝をささげていた。

2章の時と同じような絶体絶命の危機に瀕してもなお、ダニエルは、いつもように、神に祈り、感謝をささげ、賛美をささげていました。

なぜか？ それは忘れていなかったからです。

なにを？ 主を、主の恵みを、主の御業を、主の救いと恵みをです。

神によって成された、既に経験している過去の恵みと、神によって成された、これから起こる未来の恵みを忘れていなかったからです。

(早天祈祷会 申命記 主を忘れてくれるな)

ダニエルは、近視眼的な絶望ではなく、啓示によって与えられている展望にフォーカスしたら、与えられている恵みが、与えられている救いが、与えられている永遠のいのちが、与えられている神の国が、与えられている神の子とされた特権が、あまりにも感謝で、あまりにも確実で、獅子の穴に投げ込まれて死ぬかもしれないことは、窮するに値しないものだと思えてしまったんですね。

だから賛美が出てきました。

最近読んだ本の中で、賛美をささげ続けることこそ、祈りの最高点、真骨頂だと言っていました。

神を褒めたたえる賛美こそ、祈りの核ですね。

だから詩篇なんです。

だから神を褒めたたえた歌を集めた詩篇が、聖書の中で一番分厚く、真ん中にドカッと居座っているのです。

信仰を取るか、地位を取るか、信仰を取るか、利益を取るか、信仰を取るか、自分の信念を取るか、信仰を取るか、解放を取るか、なんて言う比較さえも出て来ないほどに、ダニエルにとって、神より与えられし信仰は純然たるものでした。

Conclusion

今、世の中大変なことになっていると大騒ぎですが（もちろん大変なことになっています）、でも、今になって大変なんでしょうか？

もっと、ずっとずっと前から、大変だったのではないのでしょうか？

神から離れた人が営みをした結果生じた、不平等、不公平、差別、格差、誇張、隠蔽、偽装、事実の歪曲、自画自賛、被造物の秩序の乱れ、そして環境破壊。

神から人が離れてからずっと、神様は、聖書は、緊急事態宣言出し続けてきました。

その神の緊急時代宣言の現われが、主イエス・キリストです。

私たちキリスト者は、世で発布された緊急事態宣言にも、神から任せられている社会的責任を担っていくために、しっかり対処し、解決のために協力し、祈っていかねばならないのは当然ですが、

それだけに留まっているならば、世の人が、見ているものと何ら変わりありません。

今、私たちキリスト者には、神によって成された恵みと約束にフォーカスして、眼前に広がっている問題を遥かに超える、神の救いと、神の癒しと、神の裁きに目を向ける必要があります。

そしてダニエルのように、ひざまずき、神の前に祈って、感謝の賛美をささげることが、神様から期待されていることではないでしょうか。

そんな期待をもって私たちに負担を与えるのではなく、慈しみをほどこしてくださる主イエス様に、今、目を向け、

それぞれが置かれたところで、1対1で、神様を賛美する者でありたいと願います。

お祈りしましょう。

祝祷：ダニエル6：10

ダニエルは以前からしていたように、日に三度ひざまずき、自分の神の前に祈って感謝をささげていた。